

小学校英語：米語発音指導法の研究

— 母音編 —

表 正 幸

The aim of the present paper is to examine how English pronunciation should or can be taught to pupils in the elementary school by teachers who graduated or will graduate from faculties which do not cover the study of English literature or education, or even linguistics, just before English courses are added as regular ones to the educational system of the elementary school in Japan. In the present paper, the method of teaching the pronunciation of English vowels will be revealed not only in traditional and ordinary terms but also in unprecedented terms which have been acquired from my own experience of studying and teaching.

キーワード

小学校英語、母音、強勢、連接、促音

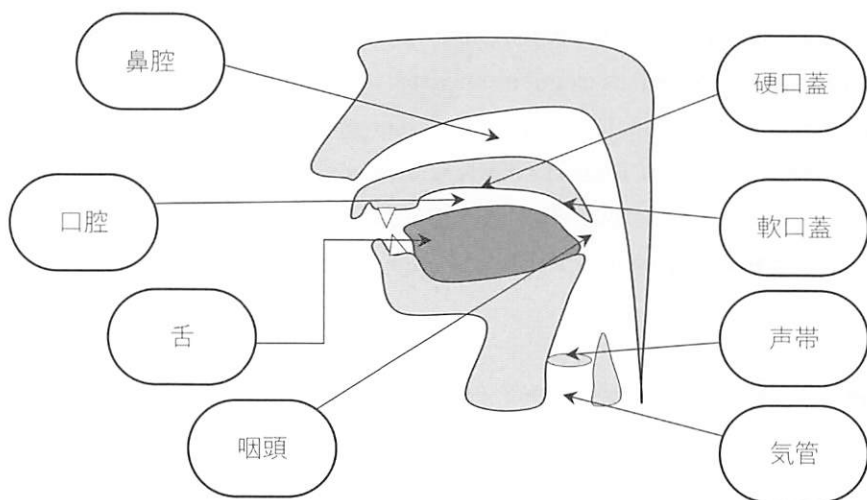
英語の発声は腹式呼吸によるものの、日本語の発声は胸式呼吸による。こうした発声法の違いを始め、「小学校英語：米語発音指導法の研究—子音編—」で指摘した英語のネイティブスピーカー（以下、ネイティブスピーカー）と日本語の話者の舌の動きと形の違いから、日本語の音と英語の音に同一のものは一音もない。とは言うものの、日本語の話者が日本語の音で英語を話したとしても、「聴覚的にはどうでもよい微差を無視」してしまっ、ネイティブスピーカーは、日本語の話者の英語も結構分かっている。

確かに、このことから、日本語の音でも英語の音に代替できると言えるのであるが、米語の正しい発音を身につけ、米語の発音の指導に当たろうとす

る場合、こうした大雑把な態度はあまり勧められるものではない。そこで、拙論では、「小学校英語：米語発音指導法の研究—子音編—」に続き、英語の母音の指導に当たって、注意すべき点として、正しい母音の発声の仕方について述べていくことにする。

音声器官の部位と名称

次の図は頭部の断面図であるが、まずは我々が音声を作り出す器官の部位と名称を確認しよう。とは言うものの、小学校教員が児童に英語の母音の発音を指導する際の必要最低限なものだけでよいであろう。



母音を作る際の口腔内のマッピング

ヒトの発話に関わる音の種類に関して、次のように述べているソシュールの言葉に注目しよう。

Après avoir analysé un nombre suffisant de chaînes parlées appartenant à diverses langues, on arrive à connaître et à classer les éléments avec lesquels elles opèrent; on constate alors que, si l'on

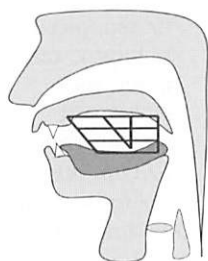
néglige des nuances acoustiquement indifférentes, le nombre des espèces données n'est pas indéfini. On en trouvera la liste et la description détaillée dans les ouvrages spéciaux ; ici nous voudrions montrer sur quels principes constants et très simples toute classification de ce genre est fondée.¹

この引用部分の要点は、ヒトの発話に関わる音の種類が数的に限られているということ、また、その分類法が非常に大雑把だということである。このことを引用部分の日本語訳を通して確認しよう。

諸種の言語にそくする言連鎖をじゅうぶん多数分析しおおせたならば、それらが取り扱う要素を知り、これを類別することができるようになる；そのときは、聴覚的にはどうしてもよい微差を無視するならば、与えられた音種の数は無際限でないことが認められる。それらの表や詳細な記述は、専門書のうちに見られよう；ここでわれわれが示そうと思うものは、この種の分類がすべて、どんな恒常的な・しごく単純な原理にもとづいているかということである。²

ソシュールが示そうとした「恒常的な・しごく単純な原理にもとづいている」音の分類を視覚化すると右のイラストと図ようになる。

右のイラストと図は、顔の断面図の口の空間のどの位置で母音の音を作るかを示すためにマッピングしたものであるが、これを拡大して、正確に見るために、図³の

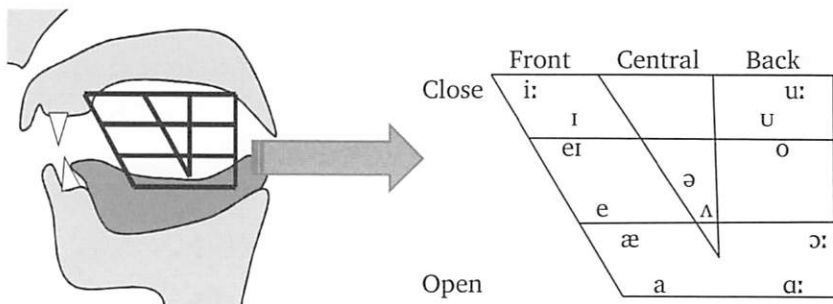


¹ Ferdinand de Saussure. *Cours de Linguistique Général*. Paris : Payot. 1972. p. 66.

² フェルディナンド・ド・ソシュール著・小林英夫訳『一般言語学講義』（岩波書店、1972年）改定第1刷。p. 62

³ 島岡丘著『教室の英語音声学』（研究社出版、1986年）同書の pp. 21-3の記述を参考に図

見方をおさらいしよう。open や close は、唇の開きや口腔における口蓋と舌の表面との間の空間の空き具合を示しているが、open は、口蓋と舌の表面との間の空間が広いことを、一方、close は、口蓋と舌の表面との間の空間が狭いことを表す。また、front や central や back は、口の中での調音する位置をそれぞれ前、中程、奥と分けて示している。



発音記号は、「小学校英語：米語発音指導法の研究—子音編—」と同様に、伝統的な母音と子音に分類している『ジーニアス英和辞典』⁴の発音記号を借用するので、拙論で扱う母音に関して、まず、今一度、記号と規則の確認をしておきたい。

母音

/i:/ sea, piece	/(j)u:/ new, reduce	/ɔ:r/ door, store
/i/ happy, react	/ə/ collect, sofa	/ɪər/ deer, fear
/ɪ/ hit, pick	/ər/ paper, sister	/eər/ hair, care
/e/ set, red	/ə:r/ bird, early	/uər/ tour, poor
/æ/ bat, cap	/ə:r/ courage, current	/ɪər/ serious, cereal
/ʌ/ cup, bus	/ei/ take, eight	/eər/ parent, vary
/ɑ:/ father, calm	/aɪ/ right, try	/er, ær/ arrow, carry
/ɔ:/ law, ball	/ɔɪ/ choice, toy	/uər/ tourist, curious
/ʊ/ book, would	/aʊ/ out, cow	/aɪər/ fire, tire
/u/ manual, tuition	/ou/ rope, road	/aʊər/ power, tower
/u:/ soup, food	/ɑ:r/ star, par	

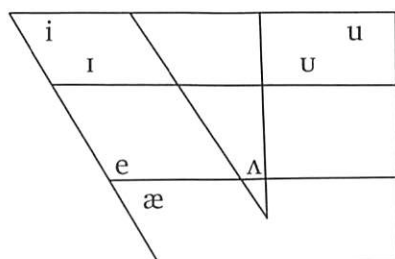
を作成。

⁴ 南出康世ら編集『ジーニアス英和辞典 第五版』(大修館書店、2014年)

発音記号の /*(j)u:*/ のかつこと /*ər*/ と /*ɪər*/ などのイタリック体は、音を抜いてそれぞれ /*u:*/ と /*ə*/ と /*r*/ と発音してもよいことを表す。

/i//ɪ//e//æ//ʌ//u//u/ の発音指導法

/i//ɪ//e//æ//ʌ//u//u/ は下の図の口腔の位置で発音されるのだが、個々の母音の特徴を見ていこう。



/i/ は、子供が喧嘩するとき「イーだ!」というときと同じ音で、口を横に長く引っ張り発音する。

/ɪ/ は、「イ」と「エ」の中間の音で、舌尖の位置に注意しないと /i/ か /e/ になってしまうので、習得が難しい母音である。

/e/ は、日本語の「エ」よりも歯と舌の表面との空間を大きく取り発音する。日本語の「エ」では、イギリス英語の /e/ に近い音になってしまう。

/æ/ は、「ア」と「エ」の中間の音で、英語で唯一胸式呼吸で発音する母音である。日本語は基本的に胸式呼吸で発音する言語なので、日本人の亜美 /ami/ にしろ恵美 /emi/ にしろ、日本語式の「ア」と「エ」の音を英語に持ち込んで、「アミ」や「エミ」と発音すると、ネイティブスピーカーには /æ/ という発音に聞こえ、亜美も恵美も同じ人名に聞こえてしまう。

/ʌ/ は、「ア」と「オ」の中間の音で、最初は /ə/ と同じ位置で練習しても構わない。

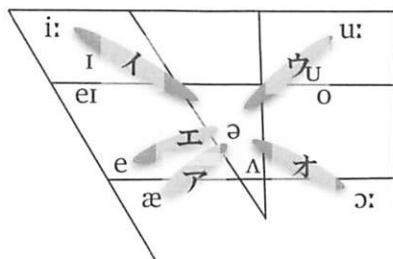
/u/ は、「ウ」と「オ」の中間の音で、次の /u/ としっかり区別することが大切な母音である。

/u/ は、「ウ」に近い音であるが、唇をしっかりすぼめ、図の位置で必ず

発音するように心がけたい。

強勢

英語の名詞、動詞、形容詞、副詞などの単語には必ず強勢のある音節が1音節以上なければならない。強勢のある音節とは、強勢のない音節と比べて、相対的に母音の時間的長さが長く、音質が明瞭で、音の大きさが大きい音節のことである。アクセントと呼ばれることもあるが、厳密には、アクセントには、「端」と「箸」のように日本語のような音の高低の差で意味の違いを表すピッチアクセント (pitch accent) と *cóncert* (名詞) と *concért* (動詞) のように英語のような音の強弱の差で意味の違いを表すストレスアクセント (stress accent) がある。実は、日本語環境で、日本語のみを母語として身につけた日本語の話者には、ストレスアクセントの区別が耳ではできない。そうした日本語の話者は、区別ができないものを理屈の上でその区別を意識しながら、習得するほかないのである。その一方法として、次のマッピングの図を見てほしい。/i:/ とか /e/ のような位置で発音されるとき、英語の母音には強勢があるのである。その位置からずれると、具体的にはイやエの空間で発生されると、/i:/ や /e/ の響きはあるものの、強勢を失ってしまうのである。すなわち、この状態の母音は無強勢なのである。以下、ア、オ、ウにも同じことが言える。



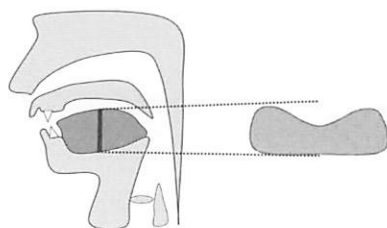
上述したアイウエオの空間で発声される無強勢の母音を記号で表す場合、『ジーニアス英和辞典』の発音記号を借用して、シュワ (schwa) と呼ばれ

るあいまい母音 /ə/ で表記する。この /ə/ 自体はアとオの中間のような響きを持つ音でも発声されるが、アイウエオの空間でそれぞれ /æ/ /i:/ /u:/ /e/ /ɔ:/ などの響きを持つ母音でも発声されるのである。すなわち、/ə/ は無強勢の /æ/ /i:/ /u:/ /e/ /ɔ:/ といった母音の代用でもあるのである。

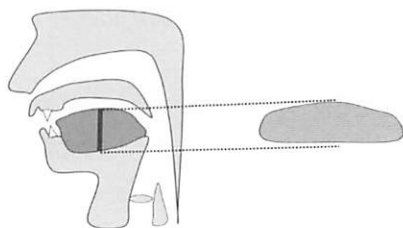
ちなみに、強勢は第一強勢から第四強勢までであるが、これは文強勢を表記する際の細かな区分なので、拙論では、二音節以上の語の発音を表記する場合、英語の辞典で多く採用されている第一強勢と第二強勢と無強勢のみを表記する。ただし、発音上の分節を示すのに便利なので、次のように『英英辞典』にならって、第一強勢は、mistake であれば、/məstéik/ ではなく、/mə'steik/ と表記する。また、第二強勢は、January であれば、/dʒænjuəri/ ではなく、/dʒænju'eri/ と表記する。言うまでもなく、強勢の印のない音節は無強勢である。また、1 音節の語には、必ず第一強勢があるので、強勢の印は蛇足なので、拙論では、eat /i:t/ のように第一強勢の印 /' / はつけない。

あいまい母音のシュワ (schwa) /ə/

先ほど、/ə/ が、/æ/ /i:/ /u:/ /e/ /ɔ:/ などの響きを持つだけでなく、アとオの中間のような響きを持つ音でも発声されると述べたが、まずは、このアとオの中間のような響きの /ə/ をどのように習得すればよいかを説明していこう。



日本語の話者



ネイティブスピーカー

「小学校英語：米語発音指導法の研究—子音編—」でも指摘したが、左の

イラストは、日本語の話者が力を抜いた時の舌の位置と断面から見た舌の形で、右のイラストはネイティブスピーカーが力を抜いた時の舌の位置と断面から見た舌の形である。

このまま日本語の話者がシュワの発音をすると、それは /ə/ ではなく、日本語の「あ」に近い音か「え」そのものの音になってしまう。正しい /ə/ の音を習得するためには、口蓋と舌の表面との間の空間を5ミリメートルくらいにすることと、次のイラストに示した舌の部位を意識的に盛り上げて発音練習をすることを指導すべきなのである。



次に、このアとオの間のような響きの /ə/ が、日本語話者の話す英語に及ぼす影響について考えていこう。話し相手がネイティブスピーカーの場合、上述したアイウエオの空間で発声される /æ/ /i:/ /u:/ /e/ /ɔ:/ などの響きを持った無強勢の母音であれ、アとオの間のような響きの /ə/ であれ、日本語の話者の英語を表記する。正しく解釈してくれる。ところが、/ə/ の母音を言語体系に持つネイティブスピーカーではない発話者、例えば、韓国人や中国人にとって、/ə/ は /ə/ であり、アイウエオの空間で発声される /æ/ /i:/ /u:/ /e/ /ɔ:/ などの響きを持った無強勢の母音ではない。すると、つぎのような図式が成り立つ。

ネイティブスピーカー：/ə/ か /æ/ /i:/ /u:/ /e/ /ɔ:/ などの響きを持った
無強勢の母音 = /ə/

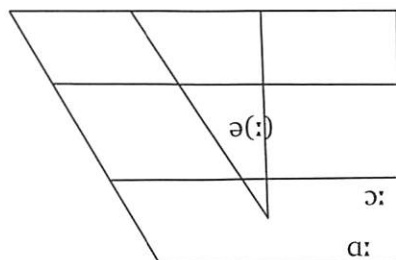
韓国人や中国人：/ə/ = /ə/ (= アとオの間のような響き)

/ə/ という発音記号が表す母音の領域のこのズレは、英語によるコミュニケーションに大きな問題を引き起こす。例えば、pocket であれば、韓国人

や中国人にとって、pocket は /'pɑ:kət/ であって、決して、/'pɑ:ket/ ではない。この現象の例は枚挙にいとまがないが、もう一例を挙げれば、韓国人や中国人にとって、official は /ə'fiʃl/ であって、決して、/o'fiʃl/ ではない。/'pɑ:ket/ や /ə'fiʃl/ と発音した場合、韓国人や中国人にとっては、それらの単語が別の単語に聞こえたり、非常に聞き取りづらい英語に聞こえたりするのである。結論すれば、コミュニケーションな英語を身につけようとした場合、日本語のみを母語とする話者にとって、/ə/ の習得の重要性をいくら強調したとしても、強調しすぎることではないのである。

/ɪə//eə//ʊə//ɔ:/ɑ:/ə:/ の発音指導法

/ə/ との説明が済んだところで、/ə/ を含む母音を見ていこう。/ɪə//eə//ʊə/ は記号にも /ə/ が含まれているので、分かりやすいが、/ɔ:/ɑ:/ はそれぞれ /ɔə//ɑə/ と読み替えて二つの母音として練習する必要がある。最初の要素の /ɪə//eə//ʊə/ は前述したとおりであるが、ここで、/ɔ:/ɑ:/ の最初の要素の /ɔ//ɑ/ について述べよう。



/ɔ/ は、唇を緩く丸め、殻をむいたゆで卵が口の中にあると想像しながら、口腔内の空間を作り、「オ」と発音する。

/ɑ/ は、英語の母音の中で口腔内の空間が一番広い音である。そのことを意識しながら、「オ」と言って「ア」と聞こえる舌の位置、すなわち、口腔内の空間の作り方を習得させる。実際の発音では、今述べたよりも舌が前よりの位置で、この音を発声するが、「小学校英語：米語発音指導法の研究—

子音編一」で述べた tapping(たたき音、または、弾音)の /t/ や /d/ をスムーズに作るためには、瞬間的に /a/ の練習段階と同じように舌の動きを練習しておくのがよい。

/æ:/ は、/ə/ の音を強く長く発音する。

/ɪə//eə//uə/ の第2要素である /ə/ は、発声時、/ə/ の位置まで達しない場合が多い⁵という指摘は興味深い。

アメリカ英語では、という母音には、スペリングに r があればそれを発音するのでそれぞれ、

	イギリス英語	アメリカ英語
ear	/ɪə/	/ɪər/
air	/eə/	/eər/
poor	/uə/	/uər/
or	/ɔ:/	/ɔ:r/
are	/ɑ:/	/ɑ:r/
earth	/ə:/	/ə:r/

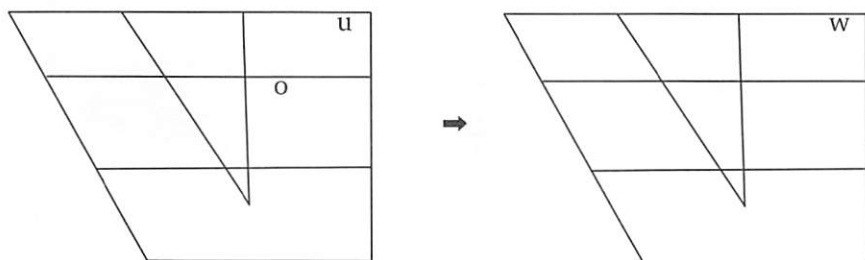
と /r/ が加わるが、前述したように前半の三つの母音は /ɔər//ɑər//əər/ と読み替えて、/ɪər//eər//uər//ɔər//ɑər//əər/ では /ər/ という二つの音を 3 : 1 の割合で一気に発音する。

/u://au//ou/ の発音指導法

/u://au//ou/ はそれぞれ /uw//aw//ow/ と読み替えて二つの母音として練習する必要がある。次の図の最初の要素の /u//a//o/ の位置から /w/ の位置にスムーズに移行することがポイントである。/w/ は、口をしっかりと

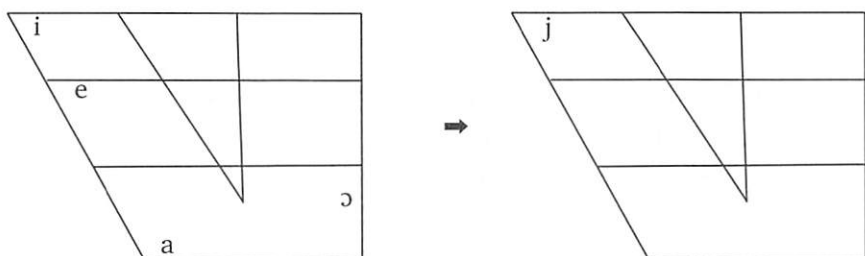
⁵ Roach, Peter. *English phonetics and phonology: a practical course*. 4th ed. Cambridge UP, 2009. p.18

ほめて「ウ」のような音を作る。



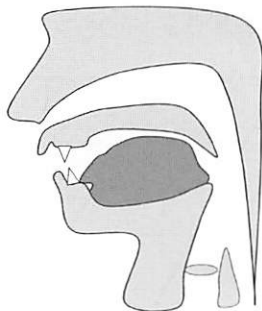
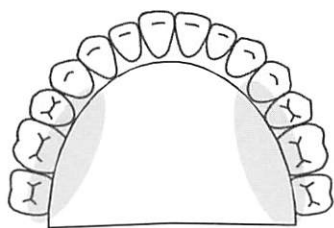
/i://eI//aI//ɔI/ の発音指導法

/i://eI//aI//ɔI/ はそれぞれ /ij//ej//aj//ɔj/ と読み替えて二つの母音として練習する必要がある。次の図の最初の要素の /i//e//a//ɔ/ の位置からの /j/ の位置にスムーズに移行することがポイントである。



ちなみに、/j/ は、「小学校英語：米語発音指導法の研究—子音編—」で述べた次のイラスト⁶のように、子音の /j/ と同じように発音する。すなわち、舌の側面を上奥の奥歯の裏側にしっかりあてて「イ」のような音を作る。

⁶ 「[無料配布教材／イラスト集] | LDH」(<https://www.lion-dent-health.or.jp/free/illust2.htm>) 2017年8月6日取得した画像を文脈に合わせて加工。



促音

英語と日本語の大きな違いの一つに、日本語の促音「っ」がある。例えば、感動詞の「あっ」とか「おっ」と言ったときの「っ」である。では、この促音に関して、英語では、どうなっているのでしょうか。次の解説を見ていこう。

日本語の促音 /q/ は一定の長さをもつ1つの音節である。英語でも抑止母音の次に破裂音が来る場合－例：[hit]－，抑止母音の次に [ʃ] が来る場合－例：[kæʃ]－，などには、促音に近い現象が生じるが，それは一定の長さをもたず，音声的環境によっては消滅してしまう性質のものである。たとえば [hít], [hítɪŋ], [kæfə], [kæft] などにおいては，促音的無音の状態は全然認められない。⁷

要するに、英語には促音はないと考えてもよいのである。ところが、学研の『レインボー英和・和英辞典』やくもん出版の『くもんのはじめての英和辞典』や小学館の『小学生のための ドラえもん はじめての英語辞典』や受験研究社の『はじめての英語新辞典』といった発音を表すのにカタカナ表記を

⁷ 鳥居次好・兼子尚道共著『英語の発音―研究と指導―』（大修館書店、1962年）p. 164

使っている小学生向けの英和辞典⁸を引くと、**batter** や **pitcher** は、それぞれ、「バッター」や「ピッチャー」とカタカナで表記している。明らかに、これは誤解を生む表記で、それぞれ、「バター」や「ピチャー」と表記するべきである。

母音の長短

更なる英語と日本語の大きな違いの一つに、母音の長短の問題がある。例えば、日本語では「おじさん」と「おじいさん」は、「じ」と「じい」という母音の長さの違いから対立を生じ、これら二つの単語は意味が違うものとして認識される。では、母音の長短に関して、英語では、どうなっているのだろうか。次の解説を見ていこう。

声道内での調音の構えとそれに伴う共鳴の持続時間の長短によって、つまり母音の長さの違いによって母音は**短母音** (short vowel) と**長母音** (long vowel) とに分けることができる。日本語では「おじさん」[iɪ]、「瀬戸」[e]、「おばさん」[a]、「太鼓」[o]、「茎」[w]⁹は短母音であるが、「おじいさん」[i:]、「生徒」[e:]、「おばあさん」[a:]、「対抗」[o:]、「空気」[u:]、は長母音で、それぞれの母音の長短によって意味が違っている。(中略) ところが英語などは比較的短い、あるいは比較的長いという母音は存在するが、同じ母音の長短によってこのように意味の区別をすることはない。¹⁰

要するに、英語には母音の長短による意味の区別をする機能はないのであ

⁸ 以下、スペースの節約のためにこれらの4つの辞典は「小学生向けの『英和辞典』」と呼ぶことにする。

⁹ この場合、/w/ は「イ」のように口を横に開き、「う」と発声する音である。要するに、日本語の「う」である。

¹⁰ 竹林滋著『英語音声学』（研究社、1996年）p. 64

る。日本の英語学習者は、この点を勘違いしていて、例えば、次のように、called と cold や pool と pull の音の対立を長く伸ばす母音と二重母音の対立であると誤解している場合が多いようである。

called	コールド	cold	コウルド
pool	プール	pull	プル

しかし、実際は拙論で述べたように、上のペアの対立は、二つの音素によるものであり、決して母音の長短によるものではない。

called	/kɔːld/ = /kəld/	cold	/kould/
pool	/puːl/ = /puwl/	pull	/pul/

こうした混乱が起きる原因が先ほども触れた小学生向けの『英和辞典』に全責任をなすりつけるわけにはいかないが、called の発音を「コールド」と pool の発音を「プール」とカタカナで表記している現実、やはり看過できないものがある。

先ほどの引用に「英語などは比較的短い、あるいは比較的長いという母音は存在する」とあるが、このことは知っておくと発音指導上便利かもしれない。比較的短い母音、あるいは、比較的長い母音の関係は次のようになっている。

a. 長い	b. 中間	c. 短い
(有声子音の前および語末の [iː])	(有声子音の前の [ɪ] および無声子音の前の [ɪ̥])	(有声子音の前および無声子音の前の [ɪ])
bead [biːd]	bid [bɪd]	bit [bɪt]
bee [biː]	beat [biːt] ¹¹	

¹¹ 竹林滋・斎藤弘子共著『新装版英語音声学入門』（大修館書店、2008年）p. 31

有声子音や無声子音の区別は、有声音や無声音の区別と同じで、声帯に手を当て、比較的、声帯の振動がある音素が有声音、一方、比較的、声帯の振動がない音素が無声音である。子音に関して、この区別をはっきり示せば、次のようになる。

無声子音 = /p/ /t/ /k/ /f/ /θ/ /s/ /ʃ/ /tʃ/ /ts/

有声子音 = /b/ /d/ /g/ /v/ /ð/ /z/ /ʒ/ /dʒ/ /dz/ /m/ /n/ /ŋ/ /l/ /r/

言うまでもなく、母音はすべて有声音である。

接続

リスニング対策も含め、発音の指導上は、英語の意味の塊で、子音と母音をつなげて練習させるのがよい。具体的には、意味の塊を構成するものに次の①～⑨のようなものが挙げられる。

①節 (S+V)

When the cat is away, the mice will play.

②長い主部

The flowers in this garden look their best in summer.

③付加疑問文中の付加部

Terrible weather we're having, **isn't it?**

④呼び掛けの語

Do you have a minute, **doc?**

⑤文修飾の副詞

His death **naturally** came as a shock to her.

⑥文頭に移動された副詞 (句)

In the garage he found the gadget.

⑦同格語句

I'd like you to meet a friend of mine, Sue.

⑧挿入部分

The answer, it seems, is complicated.

⑨文頭の「疑問詞 + 名詞」

What number are you calling?

例えば、①の英語であれば、次のように、子音と母音をつなげて発音練習させる。

When the cat is away...

/hwen ðə kætɪzəweɪ/

ここで注意しなければならないのは、「小学校英語：米語発音指導法の研究—子音編—」で述べたように、子音が単語のどの位置に出てくるかによって、発音が異なることである。すなわち、cat is は /kætɪz/ であって、/kætʰɪz/ ではない。こうした子音の音声的性質が異なる現象を**連接** (juncture) と言うが、このことは母音にも当てはまる。『英語音声学』に挙げられている例¹²を紹介したい。

peace talk ⇔ pea stalk

an aim ⇔ a name

peace talk ⇔ pea stalk は、/pi:s tʰɔ:k/ と /pi: stɔ:k/ との対立となり、さらに、peace の /i:/ は無声子音 /s/ の前なので発音の長さが短く、pea の /i:/ は語末なので、長い。また、音節の頭位に有声音がくる場合は、その有声音に picth (音の高低の差) が次のように生じる。

¹² 竹林滋著『英語音声学』(研究社、1996年) p. 335

an aim

/əneɪm/

a name

/əneɪm/

くれぐれも指導者が注意しなければならないのは、英語の意味の塊で、子音と母音をつなげて発音練習させるのはよいが、今述べた接続を無視した練習は百害あって一利なしという結果になりかねないことである。

移動する第一強勢

2音節以上で、第二強勢+第一強勢となっている順番の強勢を持つ語は、それが後続する単語の第一音節に第一強勢がある場合、次のようにその単語の第一強勢は第二強勢がある音節に移動する。

a Japanese boy /əˌdʒæpəˈniːz ˈbɔɪ / ➡ a Japanese boy /əˈdʒæpəˈniːz ˈbɔɪ /

この現象は**強勢移動** (stress shift) と呼ばれるが、どの形容詞や名詞に強勢の移動が起こるかが、『ジーニアス英和辞典』では《◆限定用法の場合は通例 /ə- - ˈ/: a Jápənèse bóy》と詳しく示され、また、*Longman Dictionary of Contemporary English* では ◀ を使って /ˌdʒæpəˈniːz◀/ と示されている。

英語の先生とイギリス人の先生

中国語には濁音がない。すると中国の人は日本語のお父さん意味の「パパ」とトランプの「ババ」をどう聞き分けているのだろうか。こうした疑問にふと誘われるのは、トランプの「ババ」が中国の人の耳には「パパ」と響いているはずだからである。ある日、私が指導していた中国語を母語とする中国人留学生にこの疑問をぶつけてみた。その留学生はその2語を pitch すなわち音の高低の差で聞き分けていると教えてくれた。日本では、句の強勢の指導はあまり徹底していない感じがするが、ここのことは句の強勢の指導をき

ちんとしないと誤解を生じる可能性があることを示唆している。例えば、an English teacher は English と teacher のどちらを強く発生するかで、次のように意味が異なるのである。

an English teacher
英語の先生

an English teacher
イギリス人の先生

ネイティブスピーカーだけでなく、pitch stress で生まれ育った英語学習者はこの違いを聞き分ける。

最後に

英語を指導してきた経験から、日本語にはない、あるいはあってもあまり意識されない点を述べてきた。筆者は、ネイティブスピーカーのように発音する必要など毛頭ないと思うのだが、拙論で指摘してきた点を無視してしまつては、通じない英語か、誤解を与える英語になってしまう可能性がある。英語を指導するものはこのことを念頭に置いて、通じる英語と誤解を与えない英語を教えなければならないであろう。